
一夏以外の男がISに乗ったらこうなるだろ、普通

観光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一夏以外の男がISに乗ったらこうなるだろ、普通

【Nコード】

N4836Y

【作者名】

観光

【あらすじ】

一夏より前にISに乗る男性があらわれたが、そいつにはISを使っ
て戦う才能がなかった。

*ISに乗れるからって都合良く戦えるわけないよね。というのが
メインのお話。男ががんばって見返す話だと思えば、オールオーケ
l。

一夏以外がI Sに乗ったらこうなるだろ、普通。

しとしとと雨が降っていた。暗くなり始めた曇天の空の下、広々としたアリーナに雨が降り注ぐ。アリーナの中は土がむき出しで雨にぬれた土が泥となって、排水溝に流れていた。そんな場所で一人の少年が膝をつきうつむいていた。

「……」

振り下ろした拳が泥を跳ね上げて音を立てる。泥が跳ね彼の頬を汚した。彼の姿は満身創痍、泥に汚れた体が傷つきぼろぼろだ。なによりも彼の表情が辛そうで、痛ましくて、見てられない。

——彼は、世界で初めてI Sに乗れた男性だった。女性にしか乗れなかったI Sという史上最強の兵器。すべての女性の希望にして男性の絶望の具現。男の誰もが乗りたいと願い、冷たい現実の前に絶望した兵器。それはわずかな時間で世界の流れを変え、女尊男卑の風潮を生み出してしまった。故に男にしてI Sに乗った彼はすべての男性の希望だったのだ。

「……ちくしょう」

震える声が空気を揺らす。頬にたれる泥が雨に流れ、膝から泥がしみる。だが彼はどれだけ汚れようと気にもしていなかった。そんなことを気にしている余裕なんて彼にありはしない。

——世界は優しくなんてない。いつだって一つの幸運を与えるとき、一つの不幸を与える——等価交換だ。つまるところ、彼にはISに乗る才能があってもISを操る才能が無かったのだ。

「——ちくしょう!!」

もう一度。彼は思いっきり泥を叩いた。そして止まらない。何度も何度も泥を叩いては体にかぶり、汚していく。彼が来ていた服はもう見る影もない。元々は恐ろしく高価で彼が買えるようなものではなく、国が彼に用意した物だった。それをこうして汚してしまえば周りになんと言われるかわかったものではない、しかし彼はそんなことを考えてはいなかった。今、彼の脳裏で描かれていたのは、

——やっぱり男ってこんなもんだよね。

——期待してたんだけどなあ、男性操縦者。

クラスメイト、いやそれだけじゃない。世界中からの冷たい瞳——それだけだ。

数ヶ月ISに乗り続けて、まともに戦闘もできずに落とされるだけの彼。世界が再び絶望するのは、当然だったのか。彼は落とされ、ぼろぼろにされて地面に這いつくばって見上げた女性たちの瞳が忘れられない。

——期待はずれだね。

彼はずっと我慢してきた。クラスがすべて女子で、まともに勉強したことのない学問の授業に必死でついていて。それだけでなく町であう味方であるはずの男たちに嫉妬の視線を向けられて、危ないからと家族とさえも離ればなれにされても——彼はずっと努力してきたのだ。なのに——

「くそっ！くそっ！くそおおお——！！」

——どうしてあんな眼で見られなければいけないのだろうか。

彼がわるいことをしたのか？ いや、していない。むしろ彼は世界が生み出した大きなうねりを前に必死で食らいつき、努力していた。結果を出そうとしていた。すべての人に認めてもらおうと努力してきた。それは代表候補生と比べたって劣らない、むしろずっと努力してきた。だが、スタート地点が違うのだ、彼女たちとは才能が違うのだ。ただ乗れるだけの彼とは才能が違うのだ。彼がした1の努力で彼女たちは10の結果をえる。彼が限界まで努力しても彼女たちに追いつけるはずも無いのだ。だというのに、誰もが彼にそれを強要する。——できるわけがないのに。

「なんで！　なんで！？　なんでだよおお！」

もはや、なにを言うべきなのか、どうすればいいのか、彼にはわからない。ただどうにかしたくて、声を張り上げた。いつの間にか激しくなった雨に彼の声は消され誰にも届かない。あふれた涙が雨に混じって消えていった。その涙を見る物は誰もいない。

——もっと強かったらよかったのに。

彼にそういった女がいた。そのときはなにも言えなかった。だが、彼自身言いたかった。……俺だってそう思ってるよ、と。

彼にとって一番の不幸は彼自身が諦められていなかったことだろう。諦めてしまえば楽だったのに。負けて地面を這いつくばったときに、こんなもんだと思えばあの女性たちの眼を見るために顔を上げなかったのに。

悔しい。悔しくてたまらない。

十倍以上もの期間乗っていた熟練者がたった数ヶ月しかISに乗っていない初心者叩き潰しているいい気になっていることが。それだけで勝手に失望されているという事実が。世界中の男たちからも失敗の烙印を押されたことが——彼には悔しくて仕方が無い。

彼は頭を抱えて泥の中に額を落とした。ジャリが口に入り苦い味があった。ぎりつと噛み締めた歯がぎちぎちと音を立てる。

そのときだ。彼の目の前で小さく水のはねる音がした。そこには傘もささずただこっちを見下ろす女性がいた。背は程々に高く高そうなスーツを着ている。雨にぬれていてもその姿には隙はなく、鋭い眼光が印象的な女性——織斑千冬だった。

「いつまでそんなところにいるつもりだ。さっさと寮に戻れ」

彼女は見下ろしたままに、土砂ぶりの雨のなかで揺るぎもせず彼にいった。元世界最強ブリュンヒルデの名に恥じぬ姿だった。だからこそ彼は自分の今の姿と比べて、視界が涙で歪んだ。

彼女は彼に対した興味もないのだろうか。すぐに振り返るとそのままアリーナの出口へと足を向けた。

「――ふざけんなよ」

彼女の教育者としてあるまじき姿を目にしたからだろうか。彼の口から怒気にまみれた言葉が飛んだ。

「どうした？ なにかあるのか？」

『俺は――――』

彼女は不思議そうに彼を見た。――どうして今の俺の姿を見て、そんな言葉言えるんだ。彼は言葉に出さなくても気がついてほしいと、無茶を期待して、外れたからと怒りをあらわにして。そして――泣く。

「――俺はあんたみたいに強くないんだよ！」

「――――」

彼女が息をのんだ。それでも彼は止まらない。頭に手をやり髪をぐしゃぐしゃにしてみっともない表情に顔を歪めて、

「なあ、なんで俺なんだよ？ どうして俺なんだよ！？ 教えてくれよ！――…頼むから、教えてくれよ、織斑先生」

泥だらけでぐしゃぐしゃになった彼がみっともない声を張り上げて、精一杯の声を張り上げた。今まで誰にも言えなかった言葉が、口をついてあふれる。

「なんであんな眼で見られなくちゃいけないんだよ……どうして期

待はずれだって馬鹿にされなくちゃいけないんだよ……なあ、織斑先生、俺、何か悪いことしたのかな？ なにかしたなら……教えてくれよ、俺直すから！」

涙混じりの声が響く。震える声と揺れる視界。彼は必死で声を紡ぐ。精一杯の力で彼女を見上げた。

「それとも、あれかな？ 俺がISに乗れたことが駄目だったのかな。ISに憧れたのがいけなかったのかな。俺が男だからいけないのかな。俺が————生まれて来たのがいけなかったのかな？」

彼女は眼を見開いた。彼から伝わる意志が、辛いと叫んでいたから。いつそ死んでしまいたいと言っていたのを感じてしまったから。

「俺は……もう嫌なんだ！ あんな眼で見られるのも！ みんなに馬鹿にされるのも！ いやそうな眼で見られるのも！ 全部嫌なんだ！ 嫌で嫌でしかたないんだ！ 辛いんだよ！」

もう、耐えきれないよ。

彼はまた頭を抱えて泥の中に額を落とした。何度も、何度も。泥が眼に入っても、口に入っても、何度も落として叫び声を上げた。そうでもない、本当に狂ってしまいそうで。

「——えてくだ……」

彼女はそんな彼に急いで駆けよって肩を抑えて無理矢理止めた。彼女の耳にかすかな音が聞こえた。土砂降りの雨のなかでもとぎれとぎれに聞こえる、それでいて強い感情のこもった声が。

「教えて……くださ、い……！」

彼の肩をつかみ、彼女は彼の顔を見る。泥だらけでいっそ汚いと言える顔だった。顔立ちからして彼女と比べるべくもないくらい普通の人の顔。かつこ良くもなければ、むしろ醜い顔だった。その顔に彼は形容できない感情をのせて、涙で震える声を隠そうともせず、腹の底から声を上げる。

「おじえでください！ おりむらせんせい！！ おれがばかにされないほうほうを！ あいつらをみがえずほうほうを！」

(後書き)

—————

「一夏って才能ありすぎだよね」

「俺だったら無理だわ、あんなの」

という会話から誕生しました。

ISに乗る適正があっても戦う才能は別だよね、がコンセプトとなっておりまするゆえ。

きつとQB的神様に「ISに乗る才能をくれ！」っていったらこうなる可能性がかなり高いと思われ(笑)

だれか書いてくれ。

ハーレムでもなんでもない。

ISに乗る才能だけしかなかった少年が周りを見返そうと必死で努力する話を。

男の意地を見せる話がみたい。

＊あくまでネタ。他の作品に喧嘩をうってるわけでは決してないです。

むしろ私はオリ主大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4836y/>

一夏以外の男がISに乗ったらこうなるだろ、普通

2011年11月14日12時56分発行